

## ネヘミヤ記2章「指導者にある恵みの御手」

### 1A 信じる力 1-10

### 2A 調べる力 11-16

### 3A 対峙する力 17-20

#### 本文

ネヘミヤ記 2 章を開いてください。私たちはネヘミヤ記を学んでいますが、これは、「神の民の建て上げと守り」であることを 1 章で話しました。神殿が再建されるというのは、私たちが霊的に死んでいるところから、生かされて、キリストにあって建て上げられますが、それはすなわち敵との戦いです。それまで、敵のなすがままにされて、霊的に荒廃していたところ、そこで城壁を建て、守られる必要があります。神の民がいかにこれらの城壁を建て、そして町を建てていくのか、それを見ています。さらに、ネヘミヤという指導者を眺めます。神が、私たちの間でよい働きを行われ、キリスト・イエスの来られる時までこれを完成して下さいますが、そのためには、自分の志に働く神を知らないといけません。その志、そして信仰や決断、また敵にどのように立ち向かうのか、そういったことを知ることができます。

1 章では、ネヘミヤは祈りをささげていましたが、最後に「どうか今日、このしもべに幸いを見させ、この人の前で、あわれみを受けさせてくださいますように。」そのとき、私は王の献酌官であった。」とあります。ネヘミヤは、ペルシアの王アルタクセルクセスの側近でありました、献酌官というのは、王にぶどう酒の杯を持ってくる人ですが、彼は最も王に信頼される人の一人であります。なぜなら、食べ物や飲み物というのは王に毒を盛って殺すこともできるのです。レストランのウェイトーではなく、王の側近と考えてください。彼はその大役を担っていますが、けれども、彼には城壁を立て直すという強い願いと志が与えられていました。これを、文字通り首を来することもできる王に伝えて、少しおいとまさせていただかないといけないのです。それで、彼は憐れみをこの人の前で示してくださいと祈りをささげているのです。そしてその時が来ました。

### 1A 信じる力 1-10

1 アルタクセルクセス王の第二十年のニサンの月に、王の前にぶどう酒が出されたとき、私はぶどう酒を取り、王に差し上げた。それまで、私は王の前で気持ちが沈んでいたことはなかった。

時は同年のニサンの月、3 月か 4 月です。したがって、ネヘミヤがエルサレムの状況を聞いてから四か月経っています。彼は忍耐をもって祈っていました。この忍耐こそが、主が彼のうちにさらにご自身の思いを植えつけておられます。「ヤコブ 1:4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」私たちが忍耐して祈る

と、その中に神ご自身の性質が培われていきます。

彼の心は、この時にエルサレムにおける廃墟を思って、心が沈んでいました。それが、王の目にも留まることになります。まさかこれが、主の憐れみの瞬間だったとは、彼も思っていなかったかもしれません。王の前で悲しい顔をするのは、失態どころか、首が飛んでいくかもしれない重大なことです(例:エステル 4:2)。ところが、それを主は用いられます。

2 すると、王は私に言った。「病気でもなさそうなのに、なぜ、そのように沈んだ顔をしているのか。きっと心に悲しみがあるに違いない。」私は非常に恐れて、3 王に言った。「王よ、永遠に生きられますように。私の先祖の墓がある都が廃墟となり、その門が火で焼き尽くされているというのに、どうして沈んだ顔をしないでいられるでしょうか。」

ネヘミヤは恐れました。けれども、言葉を選んで王に答えました。エズラ記を見れば、初代の王キュロスは、ユダヤ人に帰還とエルサレム神殿の建設を命じましたが、その後の王が必ずしも、好意的であったわけではありません。神殿を建てるということについて、イスラエルの神を王として礼拝するということについて、常に「ペルシアの王に逆らう」というそしりを受けかねないことでした。私たちが神の働きに関わるとは、絶えずその緊張があります。イエスは主であり、王なる方ですから、神を知らない人にとっては潜在的に脅威になります。

ですからネヘミヤは、エルサレムやユダヤ人の固有名詞を使わず、誰にでもある願い、つまり自分の先祖の墓のある町、故郷が廃墟となっていることをまず話しました。私たちは、この世に対していつもそのまま話せばよい、というものではありません。騙してはいけないし、恐れて隠してもいけません、不必要なことを言わなくても良いのです。

4 王は私に言った。「では、何を望んでいるのか。」私は天の神に祈ってから、5 王に答えた。「もしも王が良しとされ、このしもべにご好意をいただけますなら、私をユダの地、私の先祖の墓のある都へ遣わして、それを再建させてください。」

王はなぜ悲しい顔つきをしているのか、と尋ね、ネヘミヤの答えに怒ることをせず、「では、何を望んでいるのか。」と尋ねました。ここに主が起こしてくださっている流れを見たのでしょうか。王など権威にある人々というのは、必ずそこに神の権威があります。ローマ 13 章 1 節でそれを言っているし、箴言にはこうあります。「21:1 王の心は、【主】の手の中にあつて水の流れのよう。主はみこころのままに、その向きを変えられる。」なので、王のために祈る、上に立てられた人々のために祈ることは、とても大切です。そこで彼は大胆に発言します。ユダの名を出し、それが先祖の墓のある町であると発言しました。

しかしこの発言の前に、彼は祈っています。瞬間祈祷です。彼が、このような祈りを何度も捧げているところを、私たちはこの後のネヘミヤ記で読みます。おそらく、王でさえも気づくことのない祈りだったでしょう。ここがネヘミヤの優れているところです。彼は深い祈りを、そして長い祈りを捧げてきましたが、決してその祈りの姿勢を崩すことはありませんでした。実務中も、どんな時にも忘れませんでした。絶えず主に拠り頼んでいたのです。パウロは私たちに言いました。「絶えず祈りなさい。(1テサロニケ 5:17)」どんな小さなことでも、「主よ、どうかあなたが私に知恵と言葉を授けてください。」と祈るのです。

6 王は私に言った。王妃もそばに座っていた。「旅はどのくらいかかるのか。いつ戻って来るのか。」王はこれを良しとして、私を遣わして下さることになり、私は予定を伝えた。

祈りが聞かれました。そして王のほうから、旅の期間を尋ねてきています。13章には6節に「32年」とありますから、12年間もいたのでしょうか。そして、ここに王妃が傍に座っているということは、これは公の場ではなく、かなり私的空間が与えられている場であったと考えられます。そしてネヘミヤは、その期間をすぐに申し出ることができました。彼は四か月の祈りの中で、信仰をもって、エルサレムの再建のために何をしなければいけないのかを考えていました。

7 また私は王にこう言った。「もしも王様がよろしければ、ユダに着くまで私が通行できるように、ユーフラテス川西方の総督たちへの手紙をいただけるでしょうか。8 そして、宮の城門の梁を置くため、また、あの都の城壁と私が入る家のために木材をもらえるように、王家の園の管理人アサフへの手紙をお願いします。」わが神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくださった。

ネヘミヤは、この動きについて、現地にて大きな反対を受けることは良く分かっていたと思います。そして資材も決定的に不足している事を知っていました。そこで、王にユダに着くまでの通過許可の手紙をお願いし、さらに材木の調達をお願いしました。私たちは信仰によって動く時に、よく計画していくことは必要です。信仰によって動くのだから、計画を立てなくていい、とうことではありません。「箴 16:3 あなたのわざを【主】にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画は堅く立つ。」ここには、計画を立てるのが自分であることが前提になっています。けれども、その計画というのは、主にゆだねていくことによって成り立っていくのだということです。

そして、最も大事な言葉あります。「わが神の恵みの御手が私の上にあったので」ということです。神の恵みの足跡です。神の恵みがあって、すべてが成り立ちます。自分が救われたことは、神の予め用意された良い行いがあって、その恵みが現れます。恵みというのは、自分で何かをしたということではなく、自分に関わらず、神が良しとみられて事を行われることです。自分には、それを受ける資格が全くないのに、それでも主が行われていることです。これを知っている人は、へりくだ

ります。自分がいかに神の祝福を受けるに値しないか知っているからです。

そしてここで、神の大きなご計画についてお話ししなければいけません。神は、ユダヤ人とエルサレムを回復してくださる意図を持っておられます。今、神殿を建て直し、城壁を建て直し、そして律法によって神の民を立て直そうとしておられます。けれども、王は回復されていません。しかし、神は彼らの王、メシアを、アルタクセルクセス王の書状をもって開始する、七十週を定めてくださいました。

ダニエル書 9 章を開いてください。ネヘミヤより前に、ダニエルは、神の民とエルサレムを回復してくださるよう、神の憐れみを求める祈りを捧げました。すると神からその答えが与えられました。それが 9 章 24 節からの言葉です。

24 あなたの民とあなたの聖なる都について、七十週が定められている。それは、背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の宥めを行い、永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油注ぎを行うためである。25 それゆえ、知れ。悟れ。エルサレムを復興し、再建せよとの命令が出てから、油注がれた者、君主が来るまでが七週。そして苦しみの期間である六十二週の間、広場と堀が造り直される。26 その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」

神は、油注がれた者、すなわちキリストを七十週のうちにもたらしことを約束してくださいました。これは、ダニエル書の他の箇所、また黙示録を読みますと、「週」は七年間のことを表していることが分かります。つまり、490 年間です。それが 25 節、「エルサレムを復興し、再建せよとの命令が出てから」ということであります。それがここ、アルタクセルクセス王がネヘミヤに与えた許可であります。ある学者が計算して、それが紀元前 445 年 3 月 14 日であると言っています。

そして新改訳による翻訳だと出てこない意味があります。25 節と 26 節のところを新共同訳で読みます。「25・・・エルサレム復興と再建についての／御言葉が出されてから／油注がれた君の到来まで／七週あり、また、六十二週あって／危機のうちに広場と堀は再建される。26 その六十二週の間と油注がれた者は／不当に断たれ・・・」七十週を、三つに区分しています。初めの七週、そして六十二週、その後でメシアが断たれます。その後、残された一週があります。

七週の間、「危機のうちに広場と堀が再建される」と読めます。つまり 49 年間の内にエルサレムの町が再建されるということです。ネヘミヤによって城壁は 52 日間の内に建てられ、その後、エ

エルサレムの城壁の中も再建されていきました。そして、次は六十二週あります。その後に、メシアが不当に断たれます。アルタクセルクセス王が再建の命令を出した、445年3月14日から、七週と六十二週の後には、先ほど言及した学者の計算によると、紀元後32年4月6日だそうです。…この時は、まさしくイエス様が公生涯を行われておられた時です。そしてその学者は福音書によって、32年4月6日というのが、イエス様が棕櫚の聖日にエルサレムに凱旋された、まさしくその日であるとしました。ゆえに、イエス様はその日にメシアであることの歓喜を受けられて、公にメシアとしてエルサレムに入城されたのです。

けれども、メシアは不当に断たれます。イエス様は、王として迎えなければいけなかったユダヤ人指導者によって、またローマによって殺されました。それから、「次に来る君主の民」とありますが、ダニエル書には7章にそれが復興ローマからであることが分かっています。つまり、ローマの民が紀元70年にやって来て、そしてエルサレムの町と神殿を破壊しました。それから「その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。」と言っていますが、七週と六十二週の後には、実は長い期間を描いています。エルサレムは紀元前70年から、ずっと異邦人の国による戦いに巻き込まれ、ずっと荒廃が続いていました。1948年のイスラエルが建国、1967年に六日戦争でイスラエルは、エルサレムを奪還しました。けれども、まだ神殿の丘には、イスラム教の寺院「岩のドーム」が立っています。

しかし、そこに神殿を建てるべく働きかける人物がいます。それが27節の「彼」すなわち、来るべき君主、反キリストです。彼はユダヤ人の多くの者と契約を結びます。これが最後の第七十週目、七年間の始まりです。その半週の後半、すなわち後半の三年半に反キリストは、いけにえと捧げ物をやめさせます。彼が自分の正体を現すのです。ユダヤ人に神殿を建ててあげるようにさせながら、最後の半週の時にはそれをやめさせ、荒らす忌むべきことを行なうということです。しかし、彼は全滅が定められています。七年間の最後にまことのキリストが再臨されて、反キリストを滅ぼされるからです。そして、エルサレムは回復し、王キリストがそこからイスラエルを、そして世界を君臨されます。

したがって戻りますと、ネヘミヤが四か月かけて嘆願し、そして王が帰還を許可したそのことは、神がご自分のキリストをこの世にもたらす時間表の始まりとしてお定めになっていたのです。

9 それで私はユーフラテス川西方の総督たちのところに行き、王の手紙を彼らに手渡した。王は、軍の高官たちと騎兵たちを私とともに送り出してくださいました。

ペルシアのスサからエルサレムまで、1000<sup>キロ</sup>以上あるところを旅しました。総督に対して、王の手紙を渡すことができ、また護衛までつけてくれました。

10 ホロン人サンバラテと、アンモン人でその部下のトビヤは、これを聞いて非常に不機嫌になった。イスラエル人の益を求める者がやって来たからである。

ネヘミヤは、現地に着くと、これからこの男たちから、非常に厳しい、執拗な嫌がらせを受けていきます。ホロン人サンバラテは、聖書ではないですが、ホロンとはおそらく、エルサレムから 10 ㎞ほど北東にあるベテ・ホロンのことだと思います。彼は、サマリア人の代表者です(4:2)。エズラ 4 章によると、サマリアの地方の役人たちが、他の周囲の人々といっしょに神殿再建を阻止するための手紙をペルシアの王に送っています。ですから再び、サマリア人による強い反対を受けることになりました。そして、ヨルダン川の向こう側にあるアモンの役人トビヤです。ネヘミヤ記 13 章、最後の章を見ると、トビヤもサンバラテも、なんと祭司たちの家族にまで深く浸透していく様子をうかがえます。彼らは、本当にネヘミヤを悩ませます。

## **2A 調べる力 11-16**

こうして、ネヘミヤは、この敵の存在をすぐに察知しました。イエス様がご自分の遣わす弟子たちに命じられました。「マタ 10:16 いいですか。わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。」私たちキリスト者は、人に対して恵みをもって、優しく接します。しかし、悪い時代ですから蛇のような聡さをもって接します。ある意味での強かさが必要です。隣人を愛していくのですが、過度に信頼することはしません。

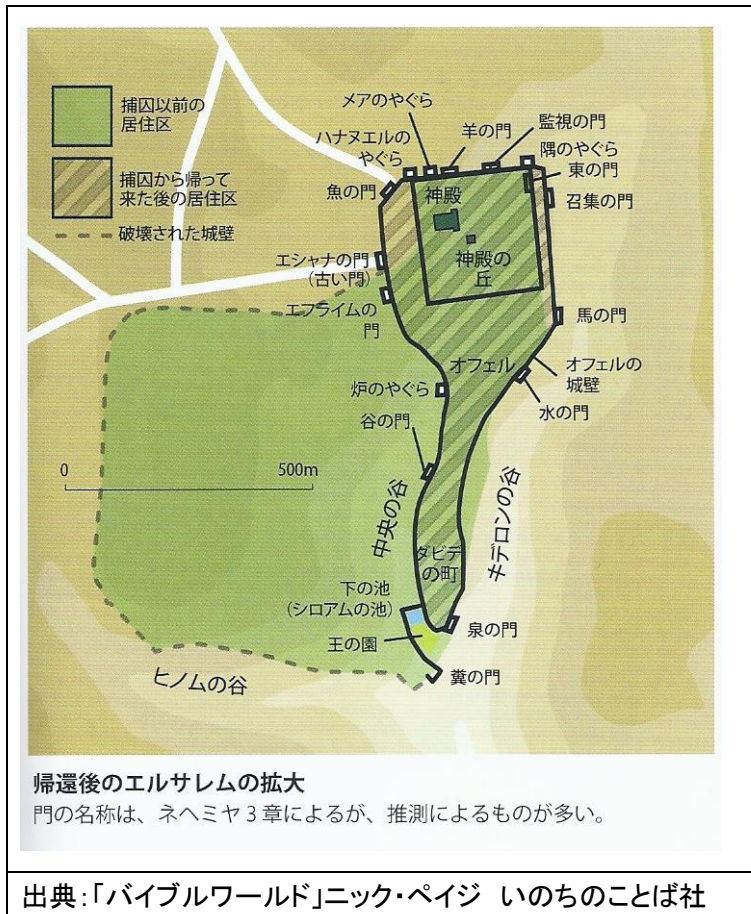
11 こうして私はエルサレムに着いて、そこに三日間とどまった。12 ある夜、私は起きて出て行った。ほかに数人の者も一緒であった。しかし私は、私の神がエルサレムのためにさせようと私の心に示しておられることを、だれにも告げなかった。また私自身が乗った動物のほかに、動物はいなかった。

彼がこれから行う城壁再建の工事が、計画段階で人に知られたら敵によって握りつぶされてしまいます。したがって、用心さは、自分の連れの数人も連れて行かなかったほどです。何と、自分の乗った獣のほかに、他の獣にも知らせないという用意周到さであります。

13 私は夜、谷の門を通過して竜の泉の方、糞の門のところに出て行き、エルサレムの城壁を調べた。それは崩され、その門は火で焼き尽くされていた。14 さらに、泉の門と王の池の方へ進んで行ったが、私が乗っていた動物の通れる場所がなかった。15 夜のうちに流れを上って行って、城壁を調べた。そしてまた引き返し、谷の門を通過して戻った。16 代表者たちは、私がどこへ行ったか、また私が何をしていたかを知らなかった。ユダヤ人にも、祭司たちにも、有力者たちにも、代表者たちにも、そのほか工事をする者たちにも、その時まで私は何も告げていなかった。

これから、聖書地図などに掲載されている、ネヘミヤの時代のエルサレムをご覧になるとよいで

しょう。西側にある谷の門から始まり、南に行きシロアムの池のおうに行きました。それから東側に回りましたが、瓦礫に塞がれていたのでケデロン谷に降りて歩いたのでしょう。そして元来た町を戻って谷の門を通りました。



そして、このことをすべて行ってから、初めて代表者に話していきます。ネヘミヤは、主に与えられているビジョン、幻をこのようにして、ただ独りで自分の目で確かめ、温めて、そして行動を起こし、そして初めて人々に話していきます。このことを聖書では、「慎み深さ」と呼びます。「ローマ 12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。」

イエス様が、慎み深い方でありました。主は、ガリラヤで奇跡を行われていた時に、らい病を癒された時に、「だれにも話してはいけない。ただ祭司のところに行って、見せなさい。」と言われました。悪霊どもが、「あなたは神の聖者です」と叫ぶと、黙らせて、出ていけと命じられました。そして人々は、イエスは誰なのかという議論を行いました。そしてついに、イエス様ははっきりと弟子たちにだけお語りになりました。「あなたは、誰だと思うか？」と。そして、ペテロが「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と答えました。そしてこのことを誰にも言うてはならない、と戒められたのです。そして、定められた時にご自身が公にキリストであることを現し、そして神が定められたように不当に断たれる、すなわち十字架につけられるようにされたのです。

主の働きを私たちは、そのまま心に与えられたことを言いまわる必要はありません。そのまま言いまわると、主から与えられたものが、そのまま主から与えられたものとして伝わりとは限らないからです。むしろ、主から与えられた志を、最大限の効果をもって遂行できるように、ネヘミヤのように祈り、熟考し、行動して、それから発言するのです。主の証しは、言葉だけでなく行ないの中で

現れるのです。行いによって現れたところに裏打ちされた言葉にこそ、主から与えられた権威と力があります。

### 3A 対峙する力 17-20

17 私は彼らに言った。「私たちが直面している困難は見てのとおりだ。エルサレムは廃墟となり、その門は火で焼き払われたままだ。さあ、エルサレムの城壁を築き直し、もうこれ以上、屈辱を受けないようにしましょう。」

独りで調査し、初めて彼は城壁再建を指揮できます。3章にて、彼がここでの調査に基づき、絶妙な連携で工事の作業を行うことができるよう指示することができました。そして、祭司たち、その他の主だった人々に自分の計画を明かしました。ネヘミヤは何が問題かを、よく見ていました。私たちは、このように問題に直視する力が必要です。よく見る力が必要です。福音を語る時も、人々の心に何があるのか、その深さを御霊によって与えられる知識や知恵で見る必要があります。それがあって、初めてイエス様がサマリアの女に伝道されたように、その飢え渴きにこたえる言葉となります。

そしてネヘミヤは「**私たちは**」と語り始め、自分自身をエルサレムの共同体の中に入れていきます。これから、チームとしての働きをネヘミヤは始めます。自分もその働き手の一部として語り始めました。1章の学びでも話しましたが、私たちは、自分の教会を傍観することはできません。あたかも自分が教会外の間人であるかのように語ることは、自分が体の中で足なのに、自分は手ではないから体に属さないと言っているのと同じです。

18 そして、私に恵みを下さった私の神の御手のことと、また王が言ったことばを彼らに告げた。すると彼らは「さあ、再建に取りかかろう」と言って、この良い仕事に着手した。

確かに、これが主の恵みによって始まったものだということを分かち合いました。そうやって彼らを励ましました。福音宣教の時に、パウロとバルナバが、異邦人の間で主が行われたことを聞き、エルサレムにいる弟子たちが、その神の恵みを喜んだということが書いてあります(11:23)。それで、彼らに結束が生まれました。再建に取りかかる意欲が生まれました。そして、これが「**良い仕事**」とあります。良いとは、聖書では神のものです。よしとみられた、という、あの「**良い**」です。

19 ところが、ホロン人サンバラテと、アンモン人でその部下のトビヤ、およびアラブ人ゲシムは、これを聞いて私たちを嘲り、蔑んで言った。「おまえたちのしているこのことは何だ。おまえたちは王に反逆しようとしているのか。」20 私は彼らにことばを返して言った。「天の神ご自身が私たちを成功させてくださる。それで、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。あなたがたには、エルサレムのうちに何の取り分も、権利も、ゆかりもない。」



ユダヤ人たちがカづけられて、喜んで人々にこの仕事について伝えたのでしょ、敵どもの耳に入りました。サヌバラテ、トビヤの他に、アラブ人ゲシムもいます。彼らは早速、彼らの働きを阻むために、そしりを使っています。「王に反逆しようとしている」と言っています。それに対して、ネヘミヤは明確に答えています。これから事業を推し進めるにあたって、彼ら敵に対するというよりも、仕事に取りかかるユダヤ人たちを強く意識して語ったのだらうと思われま。彼らを守るため、また敵に対してどのようにな姿勢で臨まなければいけないのかを語りました。

一つ目は、これは「天の神ご自身」が成功させてくださる業です。王に反逆しているとか、人間がとやかく言うような話ではなく、天の神ご自身が呼び出されて行くことあります。神が言われるのですから、私たちは事を行います。他の誰にも拠りません。そして、二つ目は「しもべである私たち」です。しもべは主人に対して、「私たちはここにおります。あなたがお命じになってください。」という、主人を待つ者たちです。自分で何かに貢献しようと働きかけるのではなく、もっぱら主から命じられることを聞くことに集中し、そして主が行いなさいと言われたら行い、何も言われなかったらそれもまた由とし、何も行わないで満足します。主に対して、自分が仕えているのだという確信が必要で。す。

三つ目は、「エルサレムのうちに何の取り分も、権利も、ゆかりもない」ない、ということです。天の神をあがめていない者、主なる神のみに仕えたと決めた者たちしか、この仕事にあずかることはできないということです。サマリア人は、共に関わらせてくれと以前、神殿の再建の時に話しました。けれども、彼らはまことの神だけでなく、他の神々にも仕えていた人々でした。神のものとしてされているわけではありません。主に仕えているようで、自分に仕えているという人です。このような人々は働きの助けになるようで、実は働きを阻んでいくこととなります。だからネヘミヤがはっきりと一線を画して、関わりを持たせないようにしました。絶えず、世的なものとの妥協、その調和をするようにという圧力がかかります。しかし、それに動じないのです。

こうやって、私たちは絶えず、「立ち向かう力」が必要です。「ヤコ 4:7 神に従い、悪魔に対抗しなさい。」ここに抜かりがあってははいけません。妥協はないです。戦っているのだ、ということ。教会を建て上げるというのは、敵に戦う人々がチームとなって戦っているところなのだということを知る必要があるでしょう。